

激動の幕末・明治維新史料

第 20 回講義 岩倉使節団の欧米視察と帰国 (原田敬一先生)

2023年1月17日

2班 広報担当

「第 27 回 岩倉使節団の欧米視察と帰国」のレジュメに従っての講義でありました。

講義の内容は、次の項目についてそれぞれの説明がありました。

1. 岩倉遣外使節団の派遣

○幕末の遣外使節団

幕末には多くの遣外使節団と留学生団が派遣されたが、その意義は藩士を主体とした青年に外交経験を積ませることと、留学生の学習成果を期待してのものであった。

1860～1867年に米国、欧州、上海、英国、仏国、露国、等へ数度にわたり派遣された。

○アジア諸国からの派遣使節団

1868～1897年にわたり、清、イラン、シャムなどは、世界各国へ使節団を派遣している。

○新政府では誰が提案したのか

- ・1869年 岩倉具視が、外交上の答礼としての使節団派遣の必要性を提案
- ・1869年 フルベッキ「フリーフ・スケッチ」を大隈重信へ提出、調査委員会の派遣の必要
- ・1872年 伊藤博文 特命理事官を派遣して条約改正に備えるべき、との意見書

○留守政府との約束→明治6年の政変の遠因

・「大臣参議及各省卿大輔約定書」により新規の政策は行わず、廃藩置県後の対応策のみとの約定であったが、世情の変化が大きく、年貢騒動、農民暴動、農民騒擾などが発生し、学制、徴兵令、地租改正、司法制度、宗教政策などを「潤飾」せざるを得なかった。

2. 誰が行ったのか—総勢約 150 名—

○使節団：46名、留学生など43名（旧幕臣13名、平均32歳）

- ・特命全権大使：岩倉具視、副使：木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳
- ・一等書記官：3名、二等書記官：5名、三等書記官：1名、四等書記官：2名
- ・理事官：6名、随員：25名

○期間： 1871.12～1873.9（岩倉具視の場合）

3. 何を見たのか

○久米邦武『米欧回覧實記』米欧12ヶ国、足掛け1年10ヶ月

○福沢諭吉『文明論之概略』西洋は文明、日中は半開（野蛮）

○（西欧の近代）を實見

- ・ホテル・ビル・水道・工場、ビスケット、都市の基盤整備（上水道・下水道）

- ・道路・鉄道・運河、地下鉄、地下トンネル、ガス灯、スエズ運河
- ・小国（ベルギー、オランダ）に注目、「国民の自主」、「文明の最上等」、「兵の強健、白国、嚙国、人民の強い気象」
- ・軍事の項目はなく記述は少ない、「強兵論」はなく「富国論」
- ・教育視察の重点：普通教育、聾啞院・盲啞院。手話・点字。文明国では人物を廟堂に求めるのではなく草莽に求めている
- ・動物園・博物館・博覧会・文書館。公園と庭園
- ・アメリカのジャーナリズムに注目：新聞社 4328, 政府の新聞社 20, 年間 882 万部
- ・産業革命、「僅かに四十年」の差、ロンドンのストライキ、契約と保護、リヴァプールのスモッグ
- ・技術競争による富国家の道
- ・同時期に左院視察団が、英国議会議を視察、報告書『視察功程』

○『米欧回覧実記』全 100 巻の記述

→アジアが重い：全 2103 頁—英	20 巻 443 頁=122 日滞在
小国	米 20 巻 397 頁=205 日滞在
	独 10 巻 215 頁= 33 日滞在
	仏 9 巻 185 頁= 67 日滞在
ヨーロッパ総論	126 頁
	伊 125 頁= 26 日滞在
帰航日程 122 頁=8 日滞在	セイロン島、シンガポール、サイゴン
	露 5 巻 108 頁= 18 日滞在
	オーストリー 3 巻 65 頁=16 日滞在
	ベルギー 3 巻 64 頁= 8 日滞在
	スイス 3 巻 60 頁=27 日滞在
	オランダ 3 巻 56 頁=11 日滞在
	スペイン 2 巻 45 頁= 8 日滞在
	維納万博 40 頁
	イスパニア・葡萄牙 1 巻 27 頁= 0 日滞在
	デンマーク 1 巻 25 頁= 5 日滞在

- ・資源＝通商の重視→＜貿易立国＞、
- ・文明とは「営業力」「生理に勤勉する力」を基礎とした蓄積や努力の総体
→「古の語に曰く、沃土の民は惰なり（豊かな土地には怠け者）」→大東亜共栄圏

以上